

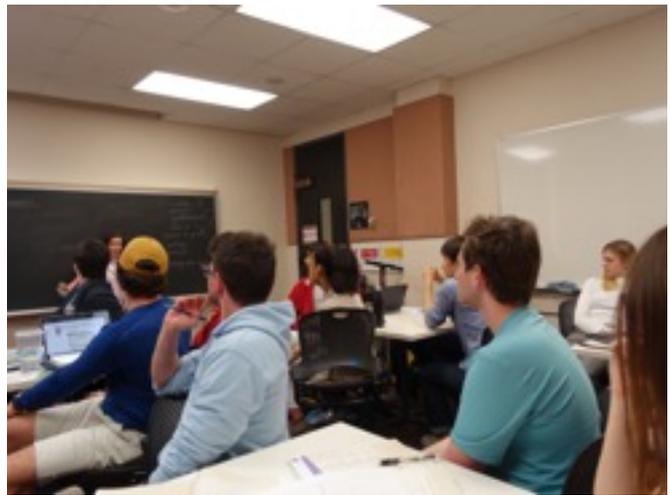
2020年1月

2014年からはじまった米国視察も今年で7年目となる。今回の第一班1月の視察メンバーは2年目研修医の朝倉峻介・村中一平・小熊貴之に加え、自費参加を希望した外科の吉田瑛司先生の4名である。

2020年1月26日、早朝に函館を出発し新幹線を利用して成田空港入りした。夕方出発のシンガポール航空で約10時間のフライトの後、現地時間1月26日午前曇り空のロサンゼルス国際空港に着陸。同じ頃にLA郊外で雲で視界を失ったヘリコプターが墜落していた。ニュース速報が同機に同乗していたNBAロサンゼルス・レイカーズのKobe Bryantと次女（13歳）の墜落死を告げ、街中に衝撃が広がっていた。我々一行は空港到着後、フルサイズバンをレンタルし、サンタモニカとハリウッドを散策。1月27日、南カリフォルニア大学（USC）医学部で、Ms. Diana Mekelの案内でノーリス総合がんセンター病院の見学ツアーが開始された。患者ケアショップ、放射線治療施設、外来点滴センター、分離細胞保存センター、女性専用（乳癌、婦人科）センター、外来抗癌剤治療センターなどを視察。頻りに Any question? と聞かれ、メンバーは事前に用意した質問を駆使しつつ臨機応変に対応して初日の病院ツアーを終了。英語まみれで緊張した時間を過ごしたメンバーは、グリフィス天文台からLAの広大な街並みを眺めホッとひと息ついた。1月28日、今回初めての企画である裁判の傍聴の日である。Long Beachにある Governor George Deukmejian Courthouse（上級裁判所）に到着。厳重なセキュリティチェックの後、Ms. Debra Cole 裁判官の法廷を傍聴。米国映画で見る裁判シーンと同じ光景が目の前で繰り広げられた。今回の事件は脅迫事件で、12名の陪審員を前に原告側と被告側の弁護士がそれぞれプレゼンテーションを行った。裁判後、裁判官達との会食を企画していただいたが、異業種との慣れない雰囲気の中緊張した時間が過ぎた。Long Beach からLAダウンタウンへ戻り、カリフォルニアサイエンスセンターでスペースシャトルエンディバーの実物を見学。1月29日、本日はUSC本学で18名ほどの大学生に混じっ



て、スペイン語の授業を受講する日である。各々5つのグループに分かれ自己紹介からはじまった。この企画は昨年から開始され担当の Ms. Gayle 先生も日本人の扱いに慣れており、また、二十歳前後の優秀な学生達はやさしく我々を気遣ってくれた。午後はポールGetty美術館で世界的名画の数々を鑑賞。夜はダウンタウンのステープルセンターで白熱したアイスホッケーの試合を見学。ハーフタイムショーでは3日前に事故死したコービー・ブライアントの追悼映像も上映され、観客は涙していた。1月30日、LAからサンディエゴへ約3時間かけて移動。朝倉君と村中君はハイウェイでのドライブを体験。午後は空母ミッドウェイの艦内見学ツアーを楽しんだ。夜は岩城教授とともに松田和子先生も会食に同席していただけた。松田先生は札幌医科大学大学院出身で日本とカリフォルニアに医師免許を所持する小児科専門医でハーバード大学やミシガン州立大学でのレジデントを修められている。現在、岩城先生がCEOを勤める創薬企業メディシノバの取締役も務めている。今回は世界をリードするお二人から講義をいただいたことは参加メンバーにとって貴重な体験となったであろう。1月31日、サンディエゴからLAまで3時間で到着予定が事故渋滞のため予定より1時間以上遅延し、空港入りが遅れた。国際線のチェックインにはなんとか間に合い帰国の途につけ、引率者としてはホッと胸をなで下ろした。



2020年2月

2月出発の第二班のメンバーは2年目研修医の吉田敬・山本崇史・中島祐輔と、自費参加を希望した外科の佐藤慧先生である。2020年2月9日、函館より新幹線を利用して成田空港入り。ちょうど中国武漢でコロナウイルスが猛威をふるい始めていた。まだ日本も含め諸外国への影響はない時期ではあったが、成田空港では全員マスクで厳戒態勢。同日夕方に米国に向けて成田を離陸し、LA到着は時差のため同日の午前11時。前回同様フルサイズバンをレンタルし、サンタモニカとビバリーヒルズを経由してハリウッドのモーテルにチェックイン。ハリウッド周辺はアカデミー賞の授賞式（韓国映画「パラサイト」が受賞）のため規制が厳しく散策できず、その夜はグリフィス天文台で絶景を鑑賞。2月10日、本日は病院見学の日である。南カリフォルニア大学（USC）医学部の Norris Comprehensive Cancer Center の Diana Mekel さんの案内で施設ツアーを開始。Image Enhancement Center, Clinical Trials, Radiation Oncology, Bone Marrow Transplant Program, Healthcare Center などを2時間かけて見学。各部署での質問タイムも全員が協力して積極的に質問を繰り返し、説明者たちにも満足していただけた模様。日中の緊張とストレスから解放された夜はステープルセンターでNBA（米国プロバスケットボールリーグ）の白熱した試合を観戦。今回の試合でも、先日のヘリコプター事故にて41歳で死去した Kobe Bryant の追悼セレモニーがなされ、LAでこよなく愛されたヒーローであったことが会場全体から伝わってきた。2月11日、LAからクルマで1時間南下しロングビーチにある Governor George Deukmejian Courthouse に到着。今回の裁判見学では、判決の言い渡しを5件ほど傍聴。その後、裁判官の Debra Cole さんに裁判所の舞台裏を見せていただいた。LAへの帰路では、トー



ランスのガラスの教会（セレブ達が挙式を上げるので有名）、ハモサビーチ（映画 LaLa Landで有名）を見学した。2月12日、USC本学で学生に混じって前回と同じ Gayle 先生のスペイン語の講義を受講。この授業は第一班も参加したクラスで、うれしいことにUSCの学生さんからの希望もあって今回も我々を受け入れていただけた。日本からのゲストが医師であることも配慮した内容の授業を

Gayle先生が事前に準備されており、和気あいあいの1時間となった。午後はカリフォルニアサイエンスセンターでスペースシャトルエンディバーの実機を見学。ポールゲッティセンターでは教科書で見たことのある名画達に囲まれ、にわか芸術家気分を味わっていた。2月13日、LAから約200Km南にあるサンディエゴに向かった。途中、吉田君が運転を担当。カリフォルニアの青い空の下、右手に太平洋を眺めつつ、フリーウェイを3時間かけて南下した。握りしめたハンドルは汗でびしょり。サンディエゴでは空母ミッドウェイミュージアムに立ち寄った。全長約300m、全幅約80mもある巨大空母に乗船し、飛行甲板、格納庫、機関室、居住施設、医務室などを見学。飛行管制室や司令室などは元搭乗員による説明ツアーを楽しんだ。夕方にはUSC医学部の岩城教授とメディシノバ取締役の松田和子先生が会食の時間を利用して講義をしてくださ



た。お話の内容は、日本や米国の医療制度それぞれの違い、現在流行初期のコロナウイルスの問題点や治療薬開発、そして研修医それぞれの進路指導にまで及んだ。2月13日、前回のグループでは交通事故の影響でLAまでの帰路に予想以上の時間を要したが、今回はサンディエゴからロサンゼルス国際空港までは順調なドライブとなった。無事出国手続きも済み、午後発の国際線に乗り込み、2020年2月14日の夜に全員元気に帰国した。



2020年の海外研修では従来の病院見学のみならず、前年度から開始された大学での講義参加、さらに今回からの新企画である米国裁判所の訪問が開始され、さらにアップグレードされた内容となった。しかし今回は1月の渡米のその日に、LAの英雄であるNBAのKobe Bryantの事故死に直面した。2月にはコロナウイルスがアジアに広がりはじめようとした時期と重なった。日程が1-2週でも遅かったら、我々の感染リスクの増大と米国への入国禁止、日本への帰国禁止の措置がなされていたかもしれない。そして帰国直後からコロナウイルス問題が日本のみならず世界を震撼させる大惨事に発展していった。2020年初頭は重大な事件が世間を揺るがした時期ではあった

2020年の海外研修では従来の病院見学のみならず、前年度から開始された大学での講義参加、さらに今回からの新企画である米国裁判所の訪問が開始され、さらにアップグレードされた内容となった。しかし今回は1月の渡米のその日に、LAの英雄であるNBAのKobe Bryantの事故死に直面した。2月にはコロナウイルスがアジアに広がりはじめようとした時期と重なった。日程が1-2週でも遅かったら、我々の感染リスクの増大と米国への入国禁止、日本への帰国禁止の措置がなされていたかもしれない。そして帰国直後からコロナウイルス問題が日本のみならず世界を震撼させる大惨事に発展していった。2020年初頭は重大な事件が世間を揺るがした時期ではあった

が、今回も大学病院や各種施設の見学を含めかけがえのない貴重な体験をみんなで共有することができた。米国施設の視察は当院独自のプロジェクトであり日本国内のどの施設もマネすることができない。この企画の成功と継続はひとえに南カリフォルニア大学の岩城裕一教授と米国コーディネーターの高埜綾子さんのおかげであることは間違いない。また、若き医師達が海外で研修することの意義を理解し、1週間の渡米を容認してくださった函館五稜郭病院の職員のみなさまの配慮があってこそその賜であると深く感謝する。